

水無瀬の別棟

正会員 坂 本 一 成 君
正会員 大 内 祥 子 君
正会員 根 本 理 恵 君

水無瀬の別棟は建築面積約 47 m²、延床面積約 76 m²の小規模な住宅である。この住宅に隣接して、同じ作者による住宅（水無瀬の町屋、1970 年）が建てられている。「町屋」竣工の約 40 年後に、以前は借家が建てられていた土地に「別棟」が建てられ、2 棟併せて 3 世代の住む、拡大家族の住まいとなった。

「別棟」の水平方向に連続する空間構成は一見さりげないがきわめて周到に計画されている。限界的な寸法体系やプロポーションを採用することで、結果として、広がりのある、視覚的に優れた内部空間が形成されているのだが、同時に生活空間としても無理なく、使いやすいように計画されている（各室の寸法体系、各階のレベル差、半地下倉庫の存在など）。「別棟」と「町屋」の接続のしかたのさりげなさも巧みだが、室 1 にある母の座と「町屋」の主室との距離関係も（母の座の床レベルが町屋の 1 階より約 900mm 高いところ、さらにその上に低い庇が廻り室 1 の天井高さを見る者に錯乱させると同時に、母の座を強調している点までも含めて）きわめて巧妙で、中庭を介して双方の住まいに住む者たちに、家族としての「見る・見られる関係」を提供している。2 棟の間の中庭が都市に閉ざされたものとならないため、別棟の一部を平屋とし、その上部が屋上テラスとなっているが、そのことが周辺の都市環境に対するひとつの提言（住まいを都市から閉ざすのではなく、さりごとて全面的に開放するのでもないという曖昧性をポジティブにとらえようとする態度の表明）となっている。結果として、この 2 棟からなる小さなコンプレックスは周囲の都市環境にさりげなく溶け込んでいるように見える。わが国の都市部の住宅環境の劣悪さを嘆くことは容易だが、その状況に真摯に取組み、なんらかの有効な解決法を提示することは、これまでも、そしてこれからも市民としての建築家の義務でなくてなんだろうか。作者は「構成」というキーワードを用いて建築を語るが、この事例に即するなら、それは「ひとつの建築の内的な構成」「かつての自作と新しい付加物との間の構成」「2 つの建築がもたらす周囲の都市環境との構成」という 3 段階の作業がここに凝縮されているといえるだろう。作者が「構成」というキーワードを用いながら提示する『デザインしない、しすぎない』方法論が、デザインばかりがかまびすしく喧伝される昨今の建築デザインへの批評であるとして、その方法論がひとつの実例として結実したことで、都市居住の小規模かつ分散的な取り組みの有効性がここに確認できることは、都市居住の新たな可能性を追求しているすべての建築設計者にとっては大きな朗報である。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。